巻頭言

Consultants

Speculative Design

白水 靖郎
一般社団法人建設コンサルタンツ協会　常任理事

SFプロトタイピングという言葉をご存じでしょうか？SFプロトタイピングとは、SFの物語や世界観を使ってまだ見ぬ未来像を具体的に描き、そこからバックキャスティングして現在の事業や技術開発に活かす手法です。過去の経験や既存事業の積み上げによる課題解決型の将来計画に比べ、創造性や意外性を誘引する発想法と言われており、米国インテル社の新規事業創出などで使われ始めました。ここで言うSFとは、サイエンス・フィクション（空想科学小説）のほか、スペキュラティヴ・フィクション（思弁小説）という意味があります。スペキュラティブ（Speculative）とは、「思索にふける」「熟考する」などを意味し、標題のSpeculative Designは、私たちが今選んでいる選択肢や前提を疑い、より良い未来について議論することを目的とします。

このSFプロトタイピングを、土木分野に取り入れた事例の一つが、第109代土木学会会長の谷口博昭さんが取り組まれた「Beyondコロナの日本創生と土木のビッグピクチャー提言～人々のWell-beingと持続可能な社会に向けて～（2022年6月）」で、私は委員兼幹事として関わりました。「失われた30年」という閉塞状態を打開するためには、世の中の前提を疑い、「ありたい未来の姿」を描くSF思考が必要だと考えたのです。我々プロジェクトチームは、「ありたい未来の姿」を「誰もが、どこでも、安心して、快適に暮らし続けられる社会」だと考え、安全・医療・雇用・教育・福祉が誰一人取り残されることなく確保されたうえで、良好な自然・文化・地域・産業・包摂が共生により構築されるべきと考えました。そして、「ありたい未来の姿」を実現するためには、価値観の転換が必要だと訴えました。その一つが「縮小を前提とする価値観」からの転換です。トレンドで予測された人口減少社会を受け入れる国家戦略は世界的にもあり得ないと警鐘を鳴らし、どうすれば減り続ける人口を食い止められるのかを考えました。もう一つは「効率性重視の価値観」からの転換です。過度に効率性を追求するのではなく、公平性や地域共生を勘案してインフラの価値を評価すべきと考え、「B/C＜1.0こそ公共事業」などの議論を真剣に行いました。

このような議論を経て、目指すべき国土像として「分散・共生型の国土」を掲げ、国土強靭化、地方創生、経済安全保障などの7つの方向性とインフラの考え方を示しました。残念ながら、1年限定の土木学会会長プロジェクトでは、具体的な制度やプロジェクトの提案までに至りませんでしたが、最近になって同じような問題意識の取り組みが見られます。例えば、「骨太の方針2026」では、公共事業評価におけるB/Cの数値偏重を改め、国家戦略、防災・減災、地域生活を守る基盤機能などを総合的に勘案する評価へ移行する方針が示されました。北海道では、食料安全保障などの観点から、第二青函トンネル構想の議論が盛り上がっています。私も関わっている沖縄本島ツインゲートウェイ構想では、沖縄北部新空港構想、沖縄自動車道延伸、沖縄鉄軌道構想を組み合わせて、北部地域振興や国家安全保障を目指しています。

インフラ整備だけではありません。日本都市計画学会でも2024年秋の学会誌で「都市・地域計画における規制緩和の功罪 1995-2024」という特集を組まれ、効率性重視・高度容積率偏重の再開発に警鐘を鳴らしています。私自身も、高層ビルが乱立する都心ではなく、そのフリンジにこそイノベーションが生まれるという考えのもと、公共空間の再構築と民間活用、公民不動産のリノベーションを通じたネイバーフッド重視型の再開発に、必要に応じてプレイヤー側にも立ちながら取り組んでいます。

与えられた問題を受動的に解くのではなく、インフラやまちづくりの専門家として自らSpeculative Designを描き、その実現のために従来の価値観の殻を破って能動的に行動する。このような建設コンサルタントが、これからの時代に求められるのではないでしょうか。